

つむぎの中のふしぎな森

名瀬市立朝日小学校 三年 濱田 鈴

ふんわりとした風が、さくらの花をゆらしています。どこからか鳥のさえずる声が聞こえています。そして、やわらかな光が、まごたちにかこまれた一人のおばあさんをつつんでいます。美しいつむぎを着て、まるで少女のようにほほえみながらねむっています。

「お母さん、おばあちゃん起きないね。」

「おばあちゃんは、お空の上に行ってしまったのよ。」

「いつか会えるのかなあ。」

「そうね。きつと会えるわよ。」

その時、おばあさんの着ていたつむぎが、一しゅんきらっと光りました。

おばあさんが着ているつむぎには、だれも知らない不思議な話がありました。

カナは、おばあさんと二人でくらししていました。家がまっすいなので、お父さんとお母さんは、遠くの町にはたらしきに行っていました。カナのおばあさんはつむぎをおり、カナもつむぎをおる仕事を手つだっていました。

ある日、カナはたんすの中に不思議な糸を見つけました。その糸はなんととも言えない不思議な色をしていました。まん

月の夜の空の色のようでもあり、朝日にかがやく海の色にも見えました。カナは、その糸をじつと見つめました。何だかすいこまれていきそうです。カナは、この糸でつむぎをおつてみたいと思いました。

「おばあちゃん。この糸をもらっていいかしら。わたし、どうしてもこの糸でつむぎをおつてみたいの。」

「カナ。その糸は短すぎるよ。使い物にならないと思うよ。それでもいいのかい。」

「どうしてもおりたいの。おねがい。おらせて。」

「そうかい。そんならおつてみたらいいよ。」

おばあさんは、にっこりうなずいてくれました。

その日から、カナはつむぎをおりはじめました。ヒジキにその糸をつけるとハタの前にすわりました。

「キーカラントントン、キーカラントントン。」

ハタの音が調子よく聞こえています。

「キーカラントントン、キーカラントントン。」

ハタの前に、長くすわっているのに、カナはおなかもすかず、ねむくもならないのです。

「キーカラントントン、キーカラントントン。」

しばらくおつていくと、そこには赤いもようのようなものが出てきました。

「あれ。これ何だろう。」

カナはむねがドキッとしました。

「キーカラントントン、キーカラントントン。」

おりつづけると、そこにはアカシヨウビンがうかびあがってきたのです。カナのむねは、もっとドキドキしました。その時です。

「クツクルー、クツクルー、クツクルー。」

カナは、はっとしました。それはアカシヨウビンの声でした。外から聞こえてくるものではありません。つむぎの中から。いえ、カナの心の中から聞こえてくるような不思議な声でした。

「キーカラントントン、キーカラントントン。」

カナはおりつづけました。不思議な糸はどれだけおつてもなくなりません。おりつづけていくと、ハイビスカスやルリカケス、アダンの木やガジュマルが次々とうかびあがってきました。そのたびに花のにおいがし、鳥の鳴き声や風にゆれる木の葉の音がするのです。

三日目の朝、あの不思議な糸はなくなっていました。カナは、つむぎをおり上げていたのです。カナのおつたつむぎの中には不思議な森が広がっていたのです。

カナは、おり上げたつむぎをおばあさんに見せました。おばあさんは、そのつむぎを一目見るなりこう言いました。

「カナ、そのつむぎは神さまのつむぎだよ。島の神さまがすんでいるんだ。ありがたいねえ。だいにするんだよ。」

おばあさんは、そのつむぎで着物をぬってくれました。こ

んなに美しく、そして不思議な着物は見たことがありません。カナはそつとそのつむぎを着てみました。

目をとじると、そこは月の光に照らされた森の中でした。うすぐらい森の中で、カナはとっても幸せでした。ずっとここにいたいような気持ちがありました。遠くの方に金色の光がかがやいています。

「あそこに行ってみよう。」

カナが歩きだそうとすると、後ろから、

「カナ。カナ。」

と声が聞こえました。

「おばあちゃん。」

カナがふりむくとそこは自分の家でした。

カナはいそいでつむぎをぬぐと、だいにたたんで、たんのそこにしまいました。それからというもの、カナはそのつむぎを二度と着ようとはしませんでした。

それから、カナのおるつむぎは、とても高い値段で売れるようになりました。お父さんやお母さんとも一しよにくらせるようになり、幸せなけっこんをしました。子どもをつみまごができ、カナは今ではおばあさんになりました。やさしいカナおばあちゃんのことを、だれもが大すきでした。

ある日カナは、いつもそばにくつついてはなれない、まごのまゆのためにゆかたをぬってやろうと思いました。いい糸

がないか、たんすの中をさぐっていました。すると、たんすのそこに不思議な色のぬのが見えました。引っぱり出してみると、それは古いつむぎでした。つむぎの中にはみごとな森が広がっています。

「ずっと昔、わたしが少女だったころにおった、あのつむぎだ。」

何だかとてもなつかしく、カナはそのつむぎを着てみたくなりました。

かがみの前に立ち、ゆっくりとなつかしいつむぎを着てみました。

目をとじると、そこは月の光にてらされた森の中でした。すぐそこに、金色の光がさしこんでいます。カナはその光の中に入ってみました。すると重かったはずの体がとてもかるいのです。

「どうしたのかしら、体がるいわ。」

カナは光の中を走りはじめました。走るたびにカナの体は少女のころにもどっていきます。

カナはどんどん走りました。むこうの方になつかしいお父さんやお母さん、おばあさんの姿が見えます。

「会いたかった。」

みんなはカナの手をとりました。カナたちのわらい声は、光の中に、しずかにしずかにとけていきました。